

近年、子供の世界も大人の世界も「いじめ」が横行している。その原因の一端は「能力」を高めようとして「脳力」を低下させる教育にあるのではないかと思う。何故未熟な子供だけではなく大人にも「いじめ」があるかという、今の親の年代は受験競争期に育った子供だからではないだろうか？「他人を超える能力」を身につけるのではなく「他人を蹴落とす能力」を迫られた結果「窮鼠猫を囓む」的に、最終的に「自分に課せられた勝利」から「臨界点を越えたストレス」が発生し、相手に噛みつくのではないだろうか？その親が自分の子供にも同じことを課していく。ある読書を推奨する講演会の「読書をすることによって自分の体験できない世界を知ることが出来る。そこから考え方の幅が広がる」話題の質疑応答で「他人の気持ちを解る必要はないと思います」と発言した中年オヤジがいたが、「他人なんかどうでもいい、自分さえよければ」という人間が子供を育てれば「いじめ」が発生するのも頷ける。自分が気に入らないからいじめる？社会は自分だけのものか？それこそ「地球は自分のために回っている」類いである。自分の存在を認めてもらうために他人を傷つける方法で無理やり自分を固持するのではなく、自分の存在を認めてもらう権利は、相手にもあることを知らなければならない。自分にも相手にも同等の権利とそれに伴う義務があるのだから。結局「いじめ」を行うものは「脳力」が足りないのではないかと思う。「脳力」が足りないから「勝て」「勝て」というストレスに耐えられず、また「世の中の贅沢を他人より多く手に入れたい」という欲望に勝てず爆発するのである。要するに精神的余裕はどこにもない。そしてさらに悪いことには「その原因は社会にある、自分のせいではない」という結論に帰着し自分を正当化するのである。

さて、そこで大きな問題は、自分が相手を認めようとしても相手がそれを理解しない場合である。相互に「脳力」がなければ戦わざるを得ない状況ができる。せつかくより良く生きようと思っても厚い壁に阻まれる。その場合、少数の正義を主張する方が、多数の欲望の悪魔たちに負けるケースもある。厄介である。いまやPTAに脅かされた教師は自己防衛のために当てにならない。自分が責められないために自分の命令の範疇に子供を束縛して子供の応用を認めないケースもある。学校教育の退廃である。

しかしそれでも目につくニュースばかりが世の中の全てではない。家庭で「思いやり」の心を育てる親、子供を正しい方向へ導く教師は大勢いる。しかしニュースというのは数少ない事件ばかりを報道するから批判ばかりが飛び出すのではないだろうか？むしろ数多い良い話を報道して手本として心に染みこませたらどうかと思う。

ところで脳は論理的な左脳・感覚的な右脳と大別されるが、その中間には両方をつなぐ脳梁という橋がある。本来は左脳で考えたことを右脳で実践できるように脳梁が相互伝達の役割を果たすのであるが、詰め込み教育は能力を左脳にとどめたままである。したがって能力は持っているから、人に言われればそれを発揮できるが、自発的には何かを実践できない。いわば宝の持ち腐れである。自分一人で左脳・右脳を使ってこそ一人前である。「どうしたらいいですか？」ではなく「どうしたらいいだろう？」と考える「脳力」を養うことが必要である。「脳力」こそが「能力」を発展させる。

「生きる」ことは「学ぶ」こと。「学ぶ」とは正しいことを選択できる能力を開発・発展させるということである。それが「人間になる」ということだと思う。(2012.7.21)